

先送りされる沖縄普天間基地問題の解決に向け

「アメリカという霸権国家との同盟関係を維持するための必死の努力なくして、日本が独自に存在できるほど世界は甘くない」

結論が出ず先送りされ続ける米軍普天間基地移設問題、それを巡っての日米同盟への影響……。鳩山由紀夫首相のリーダーシップもないまま時間だけが過ぎていく。「明治の元勲たちのような素早い決断を」と語るのは拓殖大学学長の渡辺利夫氏。日清戦争で勝利した日本が屈辱的な三国干渉の受け入れを決めるまで要した期間は僅か18日。その決断の背景には次の日露戦争に勝利するための戦略があった、という故話を踏まえて安全保障のあるべき姿を語る。

拓殖大学学長

渡辺 利夫

Watanabe Toshio

普天間基地移設を巡って 足並み揃わぬ閣内

鳩山政権が発足して約五ヵ月が経ちました。安全保障・外交では、米軍普天間基地移設問題の先送りで、日米同盟への影響が懸念されています。この状況をどう見ますか。

渡辺 まず鳩山政権には外交政策の基本軸がないように見えます。普天間問題でも二転三転。結局は結論を五月に出すということで事実上の先送りを決定しました。鳩山由紀夫首相のリーダーシップのなさが露呈したように見えます。

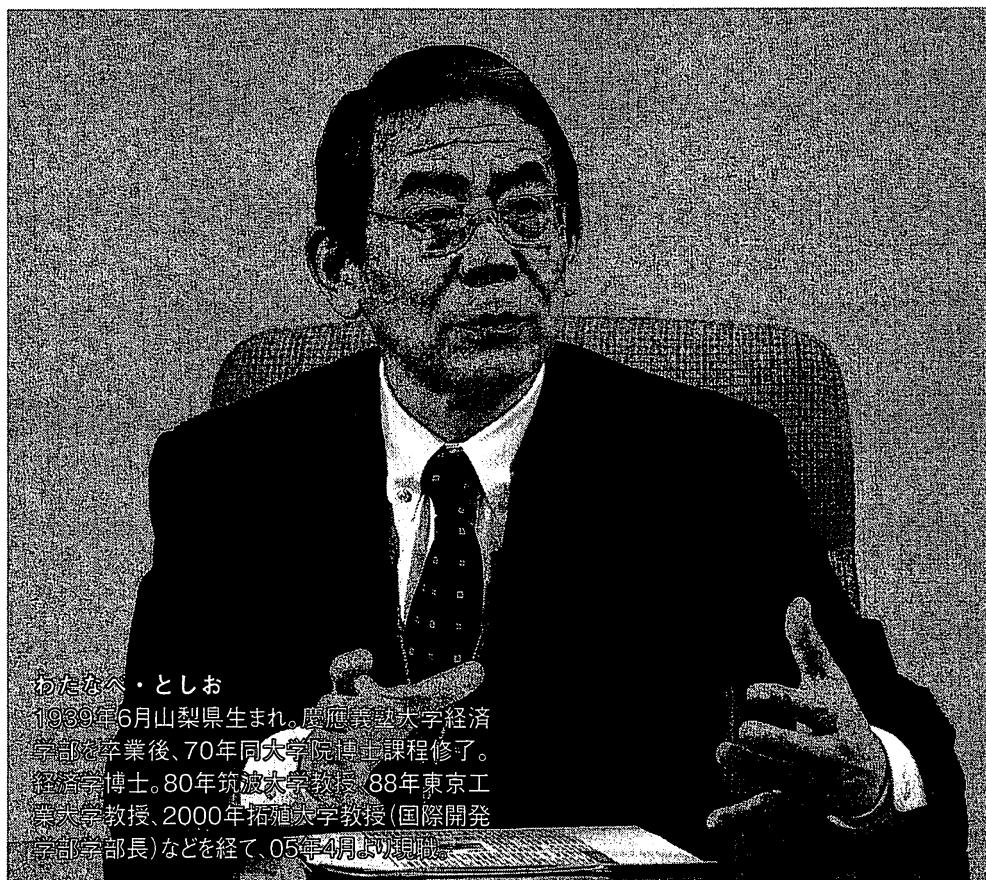
また、岡田克也外相や北澤俊美防衛相との意見の相違もあります。昨年十一月、オバマ大統領訪日の条件整備のために来日したゲーツ国防長官に、首相は「来年の名護市長選、沖縄県知事選などの様子をみて県民の総意を確かめる」と言いましたが、外相は「日米合意の正当性を検証してから」と言う次第です。

しかも、防衛相は「そんなに時間を浪費する暇はない」とも言っている。アメリカから見ればどれが政権の本意なのか全く分かりませんね。トップ層の考え方が、それぞれ違うのだから時間がかかるのも当たり前です。

過去の歴史の中で、こういった国益に関する決断が迫られたときはあつたのですか。渡辺 あります。今の日本が置かれているような状況が過去になかったのか、歴史を調べてみたところ、こんな史実があつたことに気が付いたんです。

明治二十八年（一八九五年）三月二〇日、日清戦争に日本が勝利して下関の割烹旅館「春帆樓」で日清講和会議が開かれました。

朝鮮半島の権益を巡って日本全権弁理大臣の伊藤博文と清國講和全権大臣の李鴻章が一進退の攻防を繰り広げ、調印に辿り着きました。これが同年四月十七日でした。



陸海軍の最高統帥機関)は広島にあったのですが、明治天皇も来られて、条約を批准したのが同月二十日なんですね。その後、日本は三国干渉によって遼東半島の返還を迫られました。

下関条約調印から三国干渉受け入れ詔勅まで僅か十八日
イツの三国が、日本への割譲が決まっていた遼東半島の清國へ

の返還を強圧してきましたね。

渡辺 そうです。その三国干

渉が始まったのが四月二十三日。つまり、天皇陛下の批准から三日後です。この時点で日本は戦争で国力を使い尽くしていました。しかも、まだ講話会議の最中だったにもかかわらず、諸島に向けても侵攻中だったんですね。

講和条約の調印が四月十七日、批准が二十日、三国干渉の開始が二十三日、干渉受諾の宣詔が五月十日でしたから、その間に要した時間は僅か十八日になりました。誠に迅速な過ぎませんでした。誠に迅速な

判断だったと思います。

現在の台湾島の近くにある澎湖(ほうこ)諸島に向けても侵攻中だったんですね。

渡辺 ええ。移動も大変な頃

その時点で三国干渉が加えられ、日本の首脳部は徹底的に困惑させられました。しかも、外務大臣の陸奥宗光は末期の肺結核を患つていて兵庫県の舞子で療養していました。そこに伊藤博文が大蔵大臣の松方正義を引き連れて「陸奥さん、どうしますよ」と相談しにくるんです。

最初は陸奥も返還要求には反対でしたけれども、今の状況ではこの屈辱に甘んじるしかないと。残念至極だが仕方がないと伊藤と了承したのが五月十日のことでした。その同じ日のうちに天皇陛下による遼東半島返還

の宣詔が出されました。

日、批准が二十三日、干渉受諾の宣詔が五月十日でしたから、その間に要した時間は僅か十八日になりました。誠に迅速な

判断だったと思います。

しかし、陸奥は「そうは言つても所詮は軍事力の差。もし三

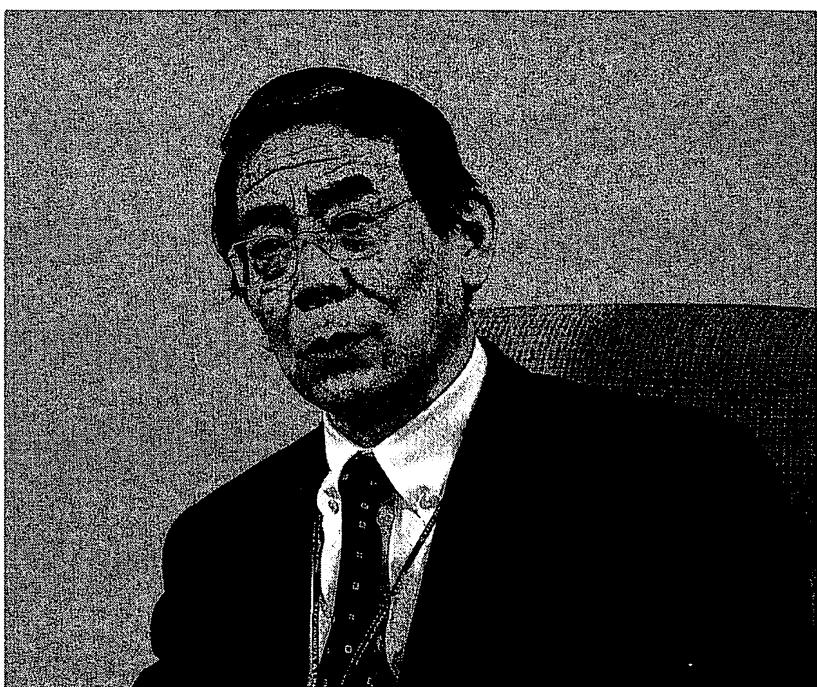
国の連合軍が艦隊でも組んで日本に攻め込んできたら到底日本は勝つことはできない」と心底そう考えていました。そして、矛を収めて以降は、臥薪嘗胆の時代に入つて日露戦争への

—— 日本では「ロシア憎し」という声が高まっています。この世論を盛り上げるスローガンが「臥薪嘗胆」、つまり屈辱にじつと耐えることでしたね。

日露戦争での勝利のための「臥薪嘗胆」

準備を整えていったんですね。

渡辺 はい。結局、一九〇五年に日露戦争で日本がロシアに勝利し、復讐が果たされたといふことになるのですが、この十八日間という極めて限られた僅かな時間内での迅速な判断が必要、そうはならなかつたでしょ。陸奥の判断力の的確さ、何より意思決定の迅速性を私は特に強調したいのです。



子ども手当、高速道路無料化などは国内の所得移転に過ぎません。子供がない人からいる人へ、車を持たない人から持っている人へと、いわば「一得一失」です。しかし、外交と安全保障はそうではありません。国民の生命と財産を無にしてしまうか否かの「オール・オア・ナッシング」の大変なことです。

政権運営においても企業経営においても指導者の資質とは何か、ということが常に問われています。外交戦における陸奥の行動は重要な材料になるのではないかと思います。もちろん、陸奥だけでなく、伊藤も松方もそうです。要するに、この頃の元勲たちですね。

日清戦争というのは近代日本が戦った初の本格的な戦争ですから、戦争に入ること自体が大変な決断の上でのことでした。しかし、これを収めるときの決断は、なお一層難しかつたでしょう。世論も完全に反対でしたが、彼らはその説得力により世論を押し切つた。

そんなことをあなた方は言うけれども、結局、外交というものは軍事力がなければ勝てっこないんだ。だからこそ、ここは胆を嘗め薪の上に臥す、まさに臥薪嘗胆の気概で軍事力を整えていこうではないか。その気概があつたが故に、あの時期、日本清戦勝利から日露戦争開戦までの日本の国力と軍事力の増強

があり得たと思うんですね。—— 国民を敵に回しても日本という国の未来のために断固とした決断をしたと。

渡辺 そういうことだと思います。日露戦争に向けて、もの凄い財政負担を強いられました。天皇御自ら宫廷費の縮小を申し出されました。国会議員や公務員の給料も引き下げた。皆が自らやっていたんですよ。

日露戦争に突入すると、これはまさに国民戦争でした。この「戦争外交」の全局を指揮したのが当時の外務大臣・小村寿太郎です。この頃は元勲の時代ではなくなりますが、彼はロシアのシベリア鉄道がウラジオストックまで伸びる寸前のところまで戦争を開始する決断をしています。

もし、シベリア鉄道が完成してしまえばモスクワからウラジオストックへ兵員や食料、武器や弾薬などの輸送が一気に可能になってしまふ。そうなつてしまえば、日本が勝てるはずがないと考えたわけです。日露戦争

国家の基本軸・外交と安全保障体系の早期確立を!

は明治三十七年（一九〇四年）

二月から始まりますが、直前の明治三十五年（一九〇二年）に日英同盟を結んでいました。

——この日英同盟が日本の勝利に寄与したんですね。

渡辺 日英同盟とは当時最高の情報国家であるイギリスと手を結んだということです。イギリスが逐一情報を日本に流してくれたんです。「シベリア鉄道がウラジオストックまであと少し」といったような情報ですね。この情報に基づく先制攻撃です。

月間かけることになりますね。

渡辺 ええ。今の鳩山政権といふのは本当にポピュリズムの最たるもので、国論を整えて自分の意見を通そうというふうには全く考えていませんね。

鳩山首相の冒頭のような発言をした頃は、年末には決めるという約束だったのに、そうはいかずにつきつ月になつた。名護市長選の結論も出ましたので、もつとずれるに違いありません。その間にアメリカが相当な圧力をかけてくるはずです。

アメリカが強硬策に出れば、ロシアと日本との国力・軍事力の間には二十倍、あるいは三十倍もの差がありました。ですから、先制攻撃で勝つより仕方がなかつた。敵を倒すというよりも、ともかく負けない戦いをやや、出来るだけ国際世論を自分の方に引きつけて講和に持ち込んでしまおう、という戦略ですね。

——なるほど。しかし、鳩山政権は九月から発足して普天間の結論を出す五月までに八ヵ月。

渡辺 今の日本の外交政策を見ていると、何を思い悩んでいますのかと言いたい思いに駆られます。世界最大の覇権国家であるアメリカを同盟国として持つてはいけないと。しかも専守防衛を旨とし、独立国のすべてに与えられた自然権である集団的自衛権の行使をも日本は否定しています。

そんな日本が生きしていくためにはアメリカと手を結んで日本の安全保障を確たるものとする。これ以上に明快な答えはないわけです。それを逡巡しているような政権に日本の外交を任せいいはずがありません。もし日米同盟を揺るがせてもいいというのであれば、日本は自主防衛のための手段を整えなければいけない。

——現在の日本の法体系で自衛の力を高めることは難しい。

渡辺 はい。覇権国家との同盟関係を維持するための必死の努力なくして、どうして日本がこの厳しい東アジアの地政学的情境の中で生存を全うできるでしょうか。日本が独自に存在できるのかと言いたい思いに駆られるほど、この地域は甘くはありません。世界最大の海洋覇権国家・イギリスとの同盟により、日本は明治末の十年と大正期を通じて産業を勃興させ、中産階級を生み、学術と芸術を振興して大正デモクラシーを開花させることができたのです。この経験を日本は徹底的に大切にすべきです。

中国の国産空母の建造計画、東シナ海制海権の掌握、北朝鮮の核ミサイル保有の危険な可能性などを日本は眼前に控えています。

過去の史実を見て、明治の元勲たちがどのような国家像をだけのスピード交渉をやつてのけたことを思い返すべきですね。改めて、日本の安全保障に対する考え方を聞かせてください。

——明治の元勲たちがこれだけのスピード交渉をやつてのけたことを思い返すべきですね。改めて、日本の安全保障に対する考え方を聞かせてください。

——環境の中での生存を全うできるでしょうか。日本が独自に存在できるのかと言いたい思いに駆られるほど、この地域は甘くはありません。世界最大の覇権国家であるアメリカを同盟国として持つてはいけないと。しかも専守防衛を旨とし、独立国のすべてに与えられた自然権である集団的自衛権の行使をも日本は否定しています。

露戦争での勝利は日英同盟があつたから可能でした。往時に世界最大の海洋覇権国家・イギリスとの同盟により、日本は明治末の十年と大正期を通じて産業を勃興させ、中産階級を生み、学術と芸術を振興して大正デモクラシーを開花させることができたのです。この経験を日本は徹底的に大切にすべきです。

過去の史実を見て、明治の元勲たちがどのような国家像を持つて、時には世論を押し切つてでもいかに果敢な決断をしたか。現政権も、この史実をしっかり見つめ直さねばならないときにつまっています。

東アジアで存在し続けるための「日米同盟」

——現在の日本の法体系で

過去の史実を見て、明治の元

勲たちがどのような国家像を

持つて、時には世論を押し切つてでもいかに果敢な決断をしたか。現政権も、この史実をしっかり見つめ直さねばならないときにつまっています。

——明治の元勲たちがこれだけのスピード交渉をやつてのけたことを思い返すべきですね。改めて、日本の安全保障に対する考え方を聞かせてください。

——環境の中での生存を全うできるのかと言いたい思いに駆られるほど、この地域は甘くはありません。世界最大の覇権国家であるアメリカを同盟国として持つてはいけないと。しかも専守防衛を旨とし、独立国のすべてに与えられた自然権である集団的自衛権の行使をも日本は否定しています。

露戦争での勝利は日英同盟があつたから可能でした。往時に世界最大の海洋覇権国家・イギリスとの同盟により、日本は明治末の十年と大正期を通じて産業を勃興させ、中産階級を生み、学術と芸術を振興して大正デモクラシーを開花させることができたのです。この経験を日本は徹底的に大切にすべきです。

過去の史実を見て、明治の元勲たちがどのような国家像を持つて、時には世論を押し切つてでもいかに果敢な決断をしたか。現政権も、この史実をしっかり見つめ直さねばならないときにつまっています。